

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
市川 孝司 <small>こうじ けいじ</small>	男 性	1 6 歳	豊橋市二川町 (東栄町本郷)

「夢の開拓団から無念の帰国へ」

「東三河郷開拓団からの手紙」より  
(部分修正)

私は、昭和17年4月に国民学校高等科に入学する寸前に、家族7人で旧満州国へ開拓団として渡りました。当時私は13歳でしたが、「日本の国政の方針で満州国を開拓し、食糧を日本へ送るということに、父と母が夢と希望を持って賛同し、私たちを連れて行ったと記憶しています。

満州では、国民学校で勉強しました。全校で40人ぐらいでしたから、とても小さな学校でした。私のクラスは男子5人、女子1人だったと思います。13歳、14歳の時の国民学校の生活は、とても楽しかったと思っています。両親の畑仕事を手伝ったり、勉強したり、野山を駆けまわったり……………。

それから現地の家へ食事によばれたこともありました。子供心にそう思ったのですが、日本軍に守られて勝手に現地に入ったのですから、今思うと侵略ということになるでしょう。

15歳になると青年学校に入り、農業と軍事教練の毎日でした。戦争に備え、馬術を学んだり、鉄砲の練習をしたりで、とても厳しい訓練を受けたことを覚えています。



開拓団の様子 東三河郷開拓アルバムより

このような生活の中で「日本軍がどこどこで勝った。」などという情報は聞いていたのですが、実際には苦戦を強いられ、昭和20年の8月15日に日本軍が敗れたことさえ知らない有り様でした。日本が負けたことが本当に分かったのは、それから10日後ぐらいのことでした。その時には、私たちはどこへ行ったらよいのか、何をしたらよいのか、全く分からない状態でした。

実は、本当に辛い満州の体験はこの時から始まるのでした。年老いた人もいれば赤ちゃんもいました。自分の家族や仲間をどうやって守り、日本へ帰ることができるのか……、その苦労は、とても書き表すことはできないくらいひどいものだったのです。帰国できたのが昭和21年11月ですから、想像してみてください。1年3ヶ月もの間、食糧を確保したり、あるときには逃げたり、住居を探したり、仕事を探したり……………という連続でした。この間に五百数十人いた仲間のうち、

二百数十人が死んでしまいました。今度は反対に満州人に襲われ、何十人も殺され、病気で次々に死んでいき……、本当にひどい有り様でした。

300km程の道のりを、家族を連れて、チチハルにたどり着くのに半年ほどかかり、そこで半年以上暮らしたのです。小さな子供を現地の満州の人に残してきました。今思うと、本当に悲惨で、苦しく悲しい出来事でした。無事日本に帰国したときでさえ、うれしいという気持ちよりは、船の中で帰国を目前に死んでいく仲間たちがいたりして、無念な心持ちであったことを覚えています。

今、平和な世の中であって本当に幸せだと思います。実はこの文を書いたのは、父の息子（31歳）です。父、孝司の話聞きながら僕が書いたのです。市川吉松というのは祖父で他界しました。僕は、あなたたちと同様、平和で豊かなこの時代に生まれてきました。そして父の話聞くうちに、平和の大切さを痛感しました。そして、そんな父や祖父の話改めて聞くことができ、本当に良かったと思います。そのことで手紙を下さったあなたにお礼を言いたいと思います。

「ありがとう。」

(記録者 鈴木久美子さん)